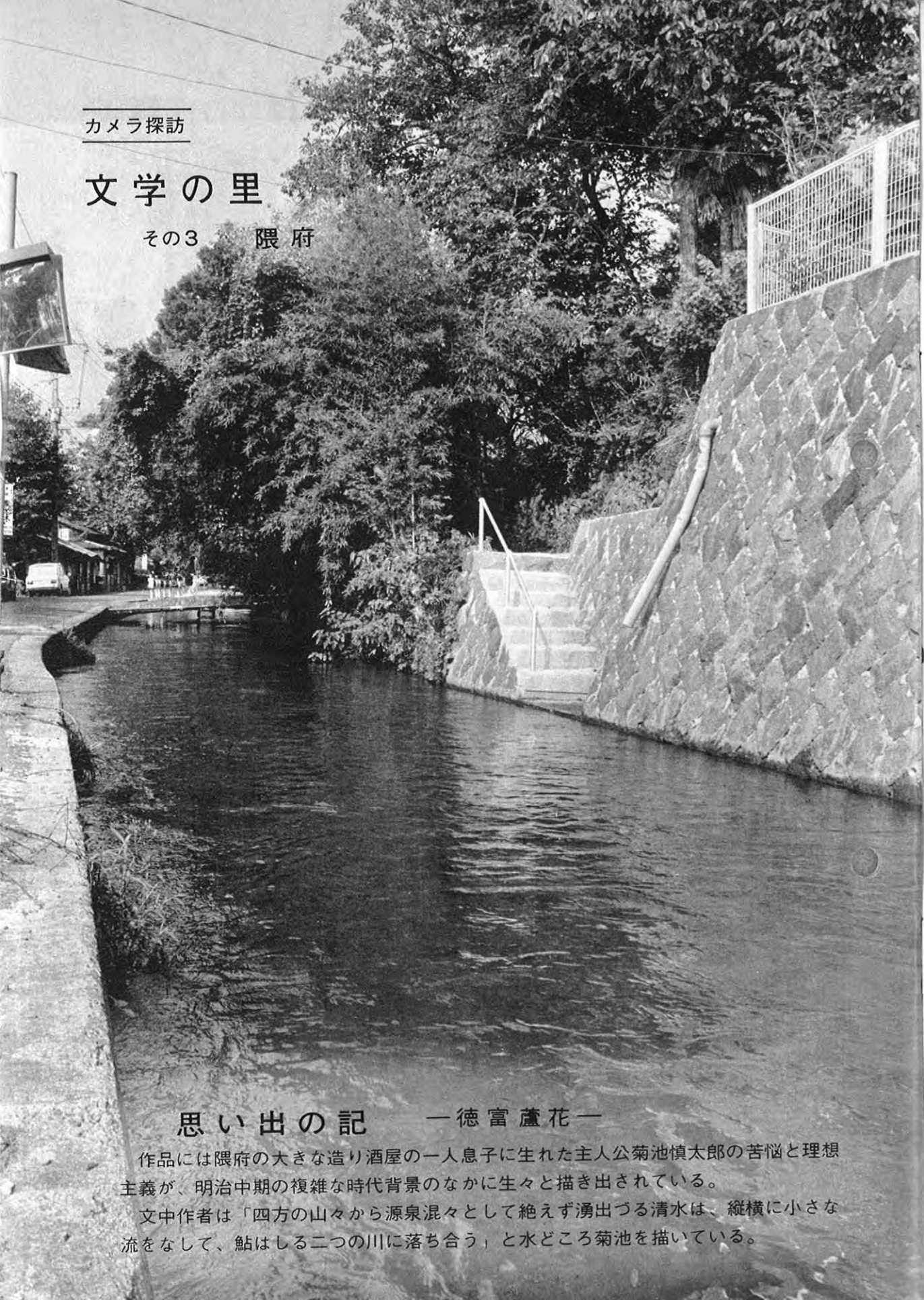


# 文学の里

その3 隈府



## 思い出の記 —徳富蘆花—

作品には隈府の大きな造り酒屋の一人息子に生れた主人公菊池慎太郎の苦悩と理想主義が、明治中期の複雑な時代背景のなかに生々と描き出されている。

文中作者は「四方の山々から源泉混々として絶えず湧出づる清水は、縦横に小さな流をなして、鮎はしる二つの川に落ち合う」と水どころ菊池を描いている。

## わたしの郷土

熊本市立高平台小学校 六年 原 啓 章

ぼく達の町高平台は、熊本市の中心から、北へ二・五キロはなれた所にあります。高平台を一口にいうと、自然に囲まれた美しい所です。そのしょうこに高平台に新任の先生がいらっしやると、その感想にはいつも「自然に囲まれ環境がよく」ということをいわれますし、校歌にも、「緑の風が吹いている」など、この高平台の自然の感じがとてもよく出ています。

このとても美しい自然も最近少しづつ自然破かいがされています。ぼくが住んでいる所も山を切り開いた所で、学校や近くの畑もそうです。もうすぐ近くの休耕田もならして大きな団地を作るのだと聞きました。自然破かいを一つもするなどは言いませんが、できることなら余り自然をこわさないでほしいと思います。

でも、この高平台には、こん虫がたくさんいます。ポプラなどの木には、やかましい程せみが鳴きます。くぬぎの木には、くわがたや、かぶと虫がどっさりいます。川や水路の上には、数えられない程トンボが飛び回ります。この間、おどりの練習で夜間照明がとまりました。次の朝そこをいってみると、照明にさわられたのか、かぶと虫が十数匹いました。その時ぼくは、つくづくこう思いました。（この高平台には、ゆう大な自然がとっても多くあるんだな）と。

それから学校行事にも、自然や広い運動場を生かしたものがありません。それは、冬のどんどこです。大きな竹を数十本切ってわらなどと組み立てます。そうすると、数十メートルのどんどこやが、広い運動場に、所せましと立ちます。それから火をつけ、ぼうぼうともえだすどんどこやに、思わず歓声を上げます。こんな行事も広い運動場と広い自然にめぐまれた所ならではの、楽しい行事だと思います。このように多くのすばらしい自然のあるこの高平台へ一度いらっしやいませんか。